



No.43

令和3年12月発行
(2021)

吉田松陰の思想と
教育の普及振興

編集発行 公益財団法人松風会
〒753-0072 山口市大手町2-18
山口県教育会館内
TEL・FAX 083-922-1218

明治維新一五十年を迎えて

公益財団法人松風会 前理事長

室 謙司

いろいろな事情により当初の発行時期から三年以上過ぎましたが、このたび「松門」第四十三号を発行することにいたしました。また、本法人の理事長も田村洋幸に替わりりましたが、前理事長の明治維新百五十年を迎えた思いを今後大切にしていきたいと考え、原文のまま掲載いたします。

「明治維新とは、十九世紀後半、日本が幕藩体制から近代天皇制へと移行する転換点となった一大変革をいう」と、また「近代天皇制の創出・形成および日本資本主義の生成・展開の出発点となった政治的、経済的、軍事的、社会的、文化的な変革の総称である」と、田中彰氏は述べておられる。(☆二) 明治維新(☆二)は、武士自らが幕府を倒し、しかも版籍奉還・廃藩置県によって、武士を辞めることによって成りたった。

松陰先生は、このような明治維新を予想し、望んでいたであろうか。

「狂夫の言」では「身分にとらわれず、人材を登用し、派閥の争いをなくすことが藩の存亡にかかっている」とある。「留魂録」では「尊皇攘夷のことはかりそめにもやめるべきではない。そこでいろいろ工夫し、前人のあとを受け継いで発展させていかなければならないのである」と記し、また獄中から高杉へ宛てて「諸侯が幕府を助けて、

朝廷を奉ずるように」と論している。

「対策一同」では「国家の大計という観点からいえば、その雄大な計略をもって、諸外国を制御しようとするれば、航海・

通商以外に方法はあるまい。…そうでなかつたら、衰え、国力が長続きせず、滅亡を待つだけである」と述べている。

松陰先生は、尊皇・開国・攘夷を唱え、と共に、各藩は幕府を助け天皇を中心に頂いた国づくりをすすめることを願っておられたのではないだろうか。

松陰先生が亡くなったからの九年間は、長州の存亡にかかわる激動の年であった。

松陰先生の処刑を聞いた高杉晋作は「…承り候ところ、我が師松陰の首、遂に幕吏の手にかかり候のよし、実に、私共も子弟の交わりを結び候ほどの故、仇を報い候らはで、安心つかまつらざる候。…」(☆三)と言っている。

「留魂録」に記された遺言は門下生によって果たされた。…激化した幕末政局において、常に局面打破の先頭を走り、明治維新への道を切り開いた長州激派、特にその中核にあつて、師の思いを体し、身を捨てて闘った門下生、彼等の尊攘運動こそ松陰の望んだものであつた。」という。(☆四)

松陰先生の死は門下生の倒幕心に火をつけることになったのである。それと共に門下生を初め多くの人材が犠牲となった。

古川薫氏は「安政五年松下村塾に在籍した主要な顔ぶれ三十人を並べて調べると、明治まで生き残った者は半数にしかすぎず、あとは割腹自殺八、陣殺三、討死二、斬首一、獄死一といった殉職者たちだ」(☆五)とまとめている。

明治維新の思想は、今日まで百五十年続いている。これはまた未来へつながっていく。

松陰先生及び塾生の実績は現代にも続いていることを、今改めて思い返し、未来を考えるきっかけにしたいものである。

注(☆印)

☆一 『長州藩と明治維新』 田中彰 著、吉川弘文館、二七三頁。

☆二 維新という言葉は「周雖旧邦、其命維新(周は旧邦なりと 雖も、其の命維れ新たり)』詩 経」が典拠である。

☆三 『吉田松陰全集』定本版、六 巻四二三頁「周布政之助宛書簡」。

☆四 『吉田松陰の思想』二二〇頁、 本山幸彦著、不二出版。

☆五 『留魂録の世界』古川薫著、山口新聞社発行